

○△□ (まる・さんかく・しかく) 茶碗プロジェクト —ユニバーサルな茶碗作りと茶会を通してみる新たな価値—

○△□ (Maru, Sankaku, Shikaku) Tea Bowl Project:
The Creation of New Value through Universal Bowl Making and Tea Ceremony

池田 晶一
IKEDA Shoichi

1.はじめに

2017年度、○△□茶会（ユニバーサル茶会）の為の茶碗制作、そして鈴木大拙館（金沢市）にて「○△□茶会」を一般社団法人ユニバーサルデザインいしかわ（以下、UDi）と共に開催した。これについては、平成30年度『紀要』第62号、論文『「○△□茶会」ユニバーサル茶会における茶碗のデザイン制作』で執筆したが、本論はその続編となる。

前論文では、センシティブユーザー*（以下、ユーザーと表記）と共に、彼ら自身の手による茶碗の制作、そしてユニバーサルな茶碗の形状（つかむ形、のせる（挟む）形、包む形）を見出し、「○△□茶会」での成果などを記載したが、本論ではその後抽出された課題と茶碗作りと茶会を通してみる新たな価値について論じてゆく。

*（センシティブユーザーとは「視覚に障がいを持つ人が、触覚や聴覚から得られる情報に敏感であるように、センシティブな感覚を持っているという捉え方から、車椅子ユーザーや視覚や聴覚などに障がいを持つ方のこと。〈出典：一般財団法人ユニバーサルデザインいしかわ 2019年度報告書〉）



〈写真1〉○△□ (まる さんかく しかく) 茶碗

2. 2019年度○△□茶碗プロジェクト

2019年度も引き続きUDiの協力を得て、共同で○△□茶碗プロジェクトを立ち上げ、○△□茶碗制作ワークショップ、○△□茶会を開催した。

ユーザーを中心に茶碗を制作するワークショップは、主に金沢美術工芸大学（以下、美大）の学生サポートや、一緒にこの場の価値観を学ぶ有志学生で運営し、○△□茶会に関しては、UDiスタッフを中心に茶道の先生達と共に茶会の運営や茶碗の展示を行った。

○△□茶碗制作ワークショップ、○△□茶会それぞれに新たな価値のいくつかの方向性が見出され、これらを進める中で、意見交換してきた。

以下、○△□茶碗制作ワークショップ、○△□茶会に章を分け進めてゆく。

3. ○△□茶碗制作ワークショップ

2017年のワークショップでは、ユーザー自らが制作した茶碗は、実際の茶会では重量が重すぎるなどで使用出来なかった為、今回のワークショップでは実用に耐える茶碗を制作することを第1の課題とした。また、茶碗の形以外の価値を模索するために、土の種類や絵付け、釉薬なども可能な範囲で制作者が自ら選び制作し、形状以外の何か（作り手の思いや使う人の茶碗に対する付加価値の様なもの）を込めること、創り出すことを第2の課題とした。

(1) 茶碗の制作

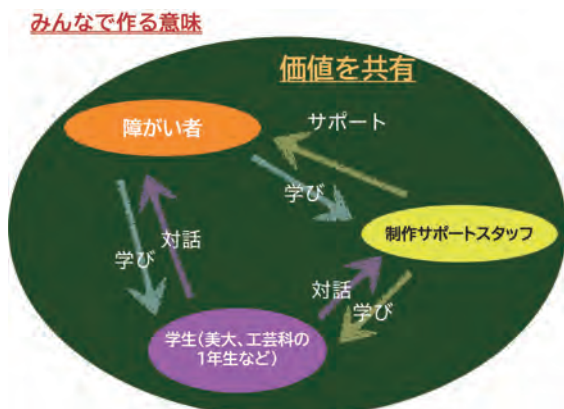
ワークショップは、第1回は茶碗の成形、第2回は絵付けと施釉（釉薬をかける）、第3回は完成茶碗のお披露目と合計3回開催した。

2017年に実施した茶碗作りは、個別に制作補助の出来る体制の無いまま制作を行った為、出来上がりの茶碗は仕上げが不完全な状態であった。今回は参加したユーザー6名それぞれに、陶芸を学ぶ制作サポートスタッフ（学生・研究生・助手）を配置し制作者の思いを出来る限り形にする為の体制を取った。

ユーザーは、肢体に不自由のある車椅子ユーザー4名、視覚障害弱視1名、視覚障害全盲1名であるが、車椅子ユーザーはそれぞれに身体の状態は異なる。粘土での茶碗成形、絵付け、施釉それぞれの作業をサポートし、一緒に器づくりに取り組んだ。

加えて、このプロジェクトの教育的な視点から、まだ専門を学ぶ前の学生（工芸科1年生）や工芸以外の専門を学ぶ他専攻の学生を交え、ユーザー1名に対し、制作サポートスタッフ1名、学生等2名を1グループとし、合計6グループ、合計24名で制作を進めた。

ユーザーを囲む制作グループの人員配置は〈図1〉の様に、お互いが学び、そこにある共有の価値を見出すことを意図した。



〈図1〉ワークショップ みんなで作る意味

① 第1回○△□茶碗制作ワークショップ（成形）

最初のワークショップ（2019年6月29日）は茶碗の成形からはじめる。



〈写真2〉釉薬と絵具のサンプルピース（撮影：UDi）



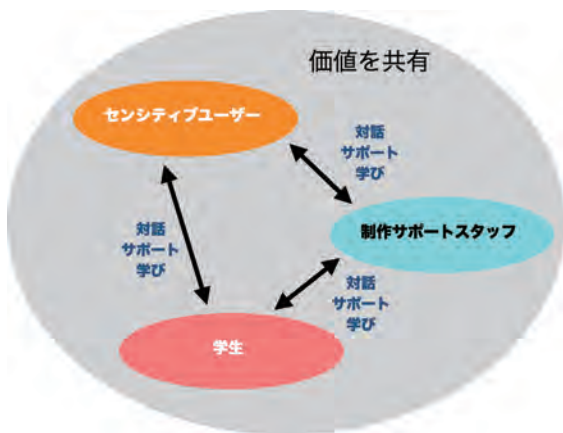
〈写真3,4,5〉第1回茶碗制作ワークショップの様子（撮影：UDi）

制作者それぞれは土の種類、釉薬や絵付けによる表情等がわからない為、土と釉薬と絵付けのサンプルピース〈写真2〉を用意しそれらをイメージし易い様にした。

サンプルピースを参考に茶碗の大まかなイメージ

をスケッチし、制作を進める。

各テーブルの制作サポートスタッフは、ユーザー、参加学生の制作補助などを行うが、テーブル毎にメンバーには制作の事以外にも対話を促した。ユーザーは、日頃不便に感じていること、学生は大学で学んでいる制作のことなど、茶碗制作を中心に個々の価値観や課題を、対話を通して共通の価値として体験する為である。

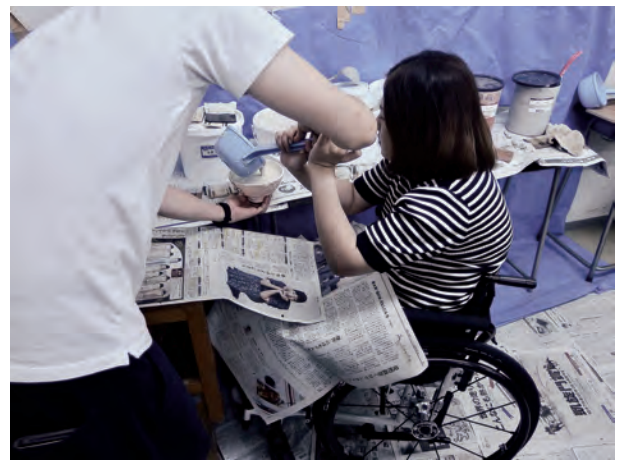


〈図2〉ワークショップ 互いの価値の共有

当初〈図1〉の様な、それぞれの関係性の意図を持って進めた。しかし実際は〈図2〉の様に、それぞれの関係性はどちらかがサポートする側、される側の様なものではなく、対話によって互いが双方向に様々な価値を共有し構築している様子が観察できた。

それは例えば、ユーザーの何かの問題に関して、サポーターが支援をする。しかしその時にユーザーも共にその問題の解決に向けて言葉を交わし続ける。お互いに創造し合い、探りながら目の前の作品が形となってゆく。そこにはどちらかが与えるという構図ではなく、立場や立ち位置の違いはあっても、共に新たな価値を共に構築して行くという場が出来上がっていた。

② 第2回○△□茶碗制作ワークショップ (絵付け、施釉)



〈写真6,7,8〉第2回茶碗制作ワークショップの様子
(撮影：UDI)

第2回（2019年8月3日）のワークショップは、第1回で制作した茶碗を乾燥、素焼きした後に行う。

絵付けのイメージをスケッチし、筆で描いた時の線の表情などを確認しながら制作を進めて行く。場合によっては、ユーザーの持つイメージをサポートが聞き取り、手を取りながら線を描いてゆく。

釉薬に関しても器を手で持つ事が困難な状況などがあるが、サポーターは可能な限り彼らの目となり手になって作業を進めてゆく。

第1回目と同様に、互いが双方向に様々な価値を共有し構築していく事ができた。

③ 第3回○△□茶碗制作ワークショップ (作品お披露目)

第3回（2019年9月29日）は、茶碗の焼成を終えた後に完成した茶碗のお披露目と、実際にその茶碗で茶を点て茶菓子を楽しみながら自身の茶碗の出来栄を確かめた。

思った様に出来たこと、出来なかったこと、また、茶を呑んだ時の感想などをそれぞれに語り合い、それを言葉にすることで価値を共有した。

茶は、このプロジェクトに賛同し、この回から参加頂いた川崎宗晃(表千家教授)先生に点てて頂き、茶を点てる側からの様々な思いも聞かせて頂いた。



〈写真9,10,11〉第3回茶碗制作ワークショップの様子 (撮影: UDi)

④ ワークショップで完成した茶碗

ワークショップで完成した茶碗の一部〈写真12~17〉を紹介する。茶碗は以下の3項目で、造形として新たな価値を見出すために素材や加飾についてその意味を整理した。

- ・手触りを作る……土(土の肌触り、砂入りの土)
 釉薬(釉薬の肌触り)
- ・色を作る……土(赤い土や黒い土)
 釉薬(釉薬の色や模様)
- ・思い入れを作る……絵付け(自身で絵を描く)
 釉薬(自身で釉薬をかける)

使用した釉薬や絵の具は複数あるが、それぞれに絵付けを行い自身が選んだ釉薬が施されている。

形状はそれぞれの作者の持ちやすさ、呑みやすさ

から作られており、釉薬の表情や絵付けの模様などには作者の思い入れが宿る。



〈写真12,13,14,15,16,17〉完成した茶碗

(2) 茶碗作りを通して見る新たな価値の構築

ここでワークショップに関してまとめておく。

ワークショップを計画し、そのプログラムを思案する時、先にも書いたが、実用に耐える茶碗の制作と、形状以外の価値を込めること、創り出すことが課題であった。その中で参加者の構成や人数、また、課題を成す為の具体的なプログラムや体制などを固めていった。ワークショップに関するこれら2つの課題は、プロジェクトのUDiメンバーと共に協議をしながら詰める事が出来た為、十分に準備が出来た。また、この運営のソフトウェア的な観点から、後に出てくる対話に関して、UDiからいろいろな機会の中で行われる様にとの勧めがあった。

ワークショップでは、テーブル毎に制作サポートスタッフがリードし、主には障害者の補助をしつつ制作を進めてゆく。茶碗制作に関しては十分なクオリティーのものを作る事が出来た。

またワークショップ時に大きな価値として見えたことは、当初目指した2つの課題に対してではなく、ワークショップを通じて行われた参加者の対話の重要性だ。参加者は茶碗作りに集中しながらも、互いの価値観に触れ、またそこで共同でものを作ってゆくという大きな意味をそれぞれに感じていたのではないだろうか。真剣な眼差しと、作業を通して得られるお互いへの信頼感が、それぞれの顔に現れていた様に感じる。

ユーザーは社会的弱者として捉えがちであるが、今回のワークショップの中では、確かに彼らは制作

に関しては多くのことをサポートしてもらう立場であるが、考えることを一緒に共有し形にする中で、サポートする側も発見し、学び、新たな模索を始めるといふ、与える与えられる関係が逆になったり、双方向に高め合ったりしている事がその場に出来上がっていった。

福祉の意味から、ノーマライゼーションの考えにある、共に生きる社会の有り様的一面を見た様に感じる。

4. ○△□茶会

○△□茶会は2019年12月1日、しいのき迎賓館2F イベントホールで開催した。

会場に関しては、車椅子ユーザーなどの参加も念頭に入れ、テーブルと椅子で実施できる立礼式で行うこととして選定にあたった。

また、車椅子ユーザー、弱視の視覚障害者にも事前に検証に参加してもらい、動線や空間の光の状態などを確認した。具体的には、車椅子でアプローチ出来るテーブルの高さの確認、また弱視のユーザーに関しては光に対する眩しさが問題となる為、また高齢者などにも配慮し、時間帯による窓の上部カーテンの使用を検証した。

このプロジェクトではセンシティブユーザーは、茶碗作りのワークショップだけではなく、可能な限りプロジェクトに関わってもらい、一緒に茶会までを作り上げてゆくことを意図して進めている。

会場の飾りなどのしつらえは、いわゆる座敷での茶会とは異なる為、空間に合わせて検討し、テキスタイルの作品を加賀城健先生（美大 工芸科 准教授）に展示協力をお願いした。

テキスタイル作品に関しては、光が豊かに美しい会場であることと、また茶碗展示の空間と茶席の空間を分けて構成できる様に、作品の選定と展示を行って頂いた。

茶会の流れに関しては、ワークショップで制作した茶碗の展示、そして茶会の客それぞれに展示した茶碗から使用したい茶碗を一つ選んでもらい、次に

茶席にてその茶碗で茶を振舞うこととした。

また、茶会はガイド役としてUDi理事長 荒井利春先生と私で、茶話会形式で客と対話をしながら進めてゆくこととした。

茶席、茶碗展示、そして茶会などについて、以下それぞれに述べてゆく。

(1) 茶席



〈写真18〉茶席の全体写真

茶席は、しいのき迎賓館の窓から見える金沢城の石垣を背景にし、立礼卓を配置した。その手前に席を設け、丸テーブル3台、椅子12脚を配した。車椅子ユーザーが客となる場合は、その席の椅子を下げて使用する。水屋は〈写真18〉の左側に配し、写真の右の席から順に茶を提供する。

客は、窓からの風景に重ね、卓での点前を見ながら茶を提供されるのを待つ。

(2) 茶碗展示

茶碗展示は〈写真20~22〉の様に行った。

〈写真19〉が入口となり、受付があり、展示会場へ繋がり、その奥が茶会の会場へとなる。

茶碗はワークショップで制作したもの35個（各参加者の作品2個もしくは1個）と、制作サポートスタッフの作品や第一回目に制作した○△□茶碗などの参考作品も展示した。

茶碗は作者毎に並べ、作品の制作意図などを表記したパネルも同時に展示した。

受付では、○△□茶碗プロジェクトの冊子を配し、参加者の様々な思いを手にとって鑑賞できる様にした。



〈写真19,20〉 展示会場の様子



〈写真21,22〉 展示会場の様子



〈画像1〉 ○△□茶碗プロジェクトの冊子 (表紙)

(3) 茶碗選び



〈写真23〉 茶碗選びの様子 (撮影: UDi)

茶会に参加する客は、使用したい茶碗を展示作品から選ぶ。見るだけではなく、手に取って持った感じ、肌触りなども体験し選んでゆく。一つの茶碗だけを触るのではなく、一通りの茶碗を手と目で確かめ選んでいる様子が印象的であった。茶碗が決まれば会場のスタッフに伝え、茶席でその茶碗を使用する。

会場のスタッフは、美大の学生を中心に編成した。会場に来る方は、茶会参加者だけではなく、茶碗の鑑賞だけで終わられる方もおられる。茶碗の説明や、このプロジェクトの趣旨などを一緒にプロジェクトを進めてきたスタッフとして伝える役割も担った。

(4) 茶会

茶会は、点前 川崎宗晃先生〈写真24〉の元、水屋を川崎社中の方5名で、司会進行をUDi理事長 荒井利春先生と私の2名〈写真25〉で進めて行く。

茶が時計回りに席の順番に振舞われ、その間にプロジェクトの趣旨を説明する。途中、荒井先生を主導に、茶を呑み終えた客から順番に対話が始められる。



〈写真24〉 茶会の様子 手前 (撮影: UDi)



〈写真25〉 茶会の様子 茶会進行 (撮影: UDi)



〈写真26,27〉 茶会の様子 感想を語る客 (撮影: UDi)

内容は、何故その茶碗を選んだのか？という問いから始まる。客には事前にその様な対話をする事は伝えられていない。しかし、最初は戸惑いながらも、自身が茶碗を手にとって感じた思いを語り出す。話の内容によっては、より深い話を引き出す様に対話が進められる。茶会の席によっては、茶碗の作者が席に同席していることもある。使い手の想いと作り手の想いが交錯する面白さがあった。

作り手の意図が同じ様に伝わったものもあれば、全く逆の想いがそこに現れたものもあった。

印象に残っているのが、ユーザーの一人が制作した茶碗で、作者本人は「分厚く、重く使いにくい」と

感じていたものが、茶碗を選んだ客は、「このずしりとした重さがなんとも言えずよかった」ののだと言う話があった。

茶会を共にした客は、ワークショップから参加したのもあれば、茶会にのみに興味を持って参加された方もおられる。年齢も立場も個々それぞれに異なる人達が、問い掛け答えられる対話に耳を傾け、自身の選んだ茶碗だけでなく、場を共にした人の数だけその価値を共有する。

(5) 茶会を通して見る価値

茶席や展示のレイアウトに関して、改めて書くことになるが、茶席を含め展示会場、全体の動線は事前に協議を重ね、計画的に作られた。

プロジェクトに参加したユーザーに対しては身体的特性を周りも理解し、それに合わせた場の状況と共に出来るが、当日初めて来られる障害を持つ客も当然視野に入れなければならない。UDiのスタッフや関係者はいわゆるユニバーサルな環境について、いろいろな場所に関する経験がある。ただ、このような茶会を行う状況においては、事前のシミュレーションは欠かせないものであった。ここでは場の一つのモデルとして大きな経験を得た。

次に、茶席での対話について。

何故その茶碗を選んだのかを問われ、改めて茶碗を見て、茶碗に触れ、それを言葉にして行く。

あらかじめ用意していた言葉ではなく、その場で求められる対話に、言葉を選びながらも、率直で自然な感想が出てくる。

感じたことを言葉に置き換えることの意味は大きい。また、その感想などを他の客の前で披露し、シェアして行く。それぞれが自分の感じた感覚と同調したり、逆に、他の客との感じ方の差異や多様性を見たり、受け止め方はそれぞれに違う。

異なった視点から、改めて茶碗の意味もそこに見出す。茶碗は、決して著名な陶芸家が制作したものではない。障害を持ったユーザーや、一緒に作ることを考えながら挑んだ学生達が制作した、名も無き茶碗である。しかしそこでは、作り手と使い

手の溢れる想いを共有した。短い時間ではあるが、「もの」「こと」に対する深い造詣が見え隠れする。一つ一つ作られた茶碗は、一つの形で結果ではあるが、それが唯一の正解ではなく、それぞれに価値を見出し、愛着を持ってその茶碗を見つめられた。

共感や違い、そして多様性を共有すること、その意味が示すものの価値には大きなものがある。

5. まとめ

2017年の茶碗作りの後、ワークショップで使用に耐える茶碗を皆で作し、その茶碗で茶会を開くという大きな目標は達成出来た。

また、思い入れと言う価値を茶碗に込めることも、素材や技法の中で実現することが出来た。

加えて、本文中で様々な触れてきたが、全体を通して大きな意味を持つのは「対話」である。

茶碗制作、茶会においても、「対話」は大きな意味をもち、価値を生み出している。「もの」「こと」に対する新たな探究の目、共感や多様性をそれぞれが受け止める。言葉を通した目には見えない大きな価値がそこに沢山現れた。

最後に価値についてまとめたい。

2017年のユニバーサルな茶碗の形状（つかむ形、のせる（挟む）形、包む形）「○△□茶碗」は、使いやすさなどの「機能的価値」、そして今回の茶碗制作で求めた、絵付けや釉薬による見た目の作者の思い入れは、心の「作用的価値」と言える。もう一つワークショップや茶会などで行われた対話は「社会的価値」ということが出来る。

当初、それぞれの使いやすい茶碗作りから始まった取り組みが、今年度の取り組みまでを経て、「機能的価値」「作用的価値」「社会的価値」を見出すに至った。

研究の流れとしては今回ここまでであるが、今後この3つの価値の意味と質について深めて行きたい。

6. 謝辞

今回この研究、このプロジェクトの実施に関わり、共同でプロジェクトに取り組んで頂いたUDiのスタッフの方をはじめ、多くの方のお力添えを頂いた。

この場を借り、心より御礼申し上げます。

7. あとがき

2019年12月に○△□茶会を終えた。2020年の今年度、新たに○△□茶碗プロジェクトが進んでゆく予定であった。しかしながら2019年度末からのコロナ禍により中断を余儀なくされている。

障害者の中には基礎疾患を患っておられる方も多い。また、ワークショップなどサポートを伴う作業では、直接の接触が避けられない。茶会に関しても飲食を伴い、現在のウイルスの影響や予防に関して、安全を確保できる一定の条件を見出せない。

次年度には何らかの動きを模索したいが、状況を見つ判断して行くしかない。または、コロナ禍後の全く新しい状況を見据える必要も感じざるを得ない。

再始動に少しの時間がかかるかもしれないが、可能性を考えて行きたいと思う。様々な人の繋がりできり立っているプロジェクトだけに、多くの人達と考え、共有してゆきたい。



〈写真28〉茶会の様子（撮影：UDi）



〈写真29〉茶会の様子（撮影：UDi）

■データ

●「〇△□茶会」

日時：2019年12月1日（日）

場所：しいのき迎賓館2Fイベントホール

展示：12:00～20:00

茶会：第一席 13:00～、第二席 14:30～、第三席 16:00～、
第四席 17:30～、第五席 19:00～

茶碗：〇△□茶碗ワークショップに参加の皆さん

点前：表千家教授 川崎宗晃

作品展示協力：金沢美術工芸大学 工芸科 准教授 加賀城健

菓子：吉はし

●「プロジェクト参加メンバー」

- ・センシティブユーザー：車椅子ユーザー 4名、視覚障害弱視 1名、視覚障害全盲 1名
- ・制作サポートスタッフ：工芸科助手、工芸科修士学生、工芸科研究生 5名
- ・参加学生：工芸科学生 7名、製品デザイン専攻学生 2名
- ・茶会協力：点前 川崎 宗晃（表千家教授）、川崎社中 5名
- ・設営協力：月輪 慶比古（願念寺 若院）
- ・装飾協力：加賀城 健（金沢美術工芸大学工芸科 准教授）
- ・ユニバーサルデザインいしかわ：荒井 利春、木下 理恵、中村 誠、安江 雪菜
- ・金沢美術工芸大学：安島諭 池田晶一

●画像提供

一般財団法人ユニバーサルデザインいしかわ 写真画像に（撮影:UDi）を表記

参考文献

池田晶一『「〇△□茶会」ユニバーサル茶会における茶碗のデザイン制作』、金沢美術工芸大学 平成30年度「紀要」、63号、2019年、pp95-106.

「〇△□茶碗プロジェクト」（冊子）、〇△□茶碗プロジェクト、2019年.

『基調講演 「〇△□茶会のプロセス」』、一般財団法人ユニバーサルデザインいしかわ 2019年度 活動報告書、2020年、pp46-48.

『フロアディスカッション「〇△□茶碗プロジェクトの進化」』、一般財団法人ユニバーサルデザインいしかわ 2019年度 活動報告書、2020年、pp49-57.

附記

本論文は平成31年度特別研究「ユニバーサル茶碗開発研究－〇△□茶碗（まる さんかく しかく茶碗）プロジェクト」（研究代表者 池田晶一、共同研究者 安島諭）の成果（の一部）である。

（いけだ・しょういち 工芸専攻／陶磁）

（2020年11月5日 受理）

